



**zero,seven and eight**   
dj newtown tribute



**Maltine**Records

## dj newtown tribute に寄せて

あなた、インターネットをしているあなた。今これを読んでいるということは Maltine Records のサーバから zip を落として、解凍して、なおかつこんな pdf を開いてくださっているということですね。私は神戸の冬の風物詩、ルミナリエを横目に喫茶店でこの文章を書いています。これから無駄に長文ではありますが、dj newtown tribute に寄せて、自分の思うところをまとめてみたいと思います。

2008 年の夏前、WIRE08 のサードステージに出演が決定しました。本当にさまざまな偶然が折り重なってそうなったのですが、それまで四つ打ちと言われる音楽ジャンルをほぼ作ってこなかったのが、それにあって初めてまとまった形でそういう音楽を作ることになり。そこで PARA ONE が浜崎あゆみの曲をリミックスしたのを聞いて "これなら hiphop の手法で真似できるかも" と思い作ってみたのが "flying between stars"。これのほかにも何曲か WIRE08 に出演するにあたって作った曲をマルチネレコードから出すことになり、そのために生まれたのが dj newtown でした。名前は完全に思い付き。適当なジャケ、適当な曲名でリリースしたこのアルバム（製作期間も全部で 1 週間程度）はある程度いろいろよく言ってもらえました。

そういうわけで 2 作目を作る気分になり、出来上がったのが high-schol girl(we loved)。ここで newtown の活動コンセプトが出来上がります。もともと自分の曲はすべて哀愁のようなものを含んでいると思いますし、自分の中では最も音楽を聴く場所である通学の電車でフィットするようになってます。それはもしかしたら郊外、ニュータウンとつながっているのではと適当につけておいたこの名義を考えてから強く感じるようになりました。昔クイックジャパンで DE DE MOUSE さんが "僕がやっているのは郊外の音楽だ" と発言していたことが思い出されます。newtown はこの部分を強く打ち出してやっていくユニットにしようと考えたのはそのころです。あとはマルチネからリリースするという特性上、公式仕事ではできないこと、つまりどちらかというとサンプリングをメインにしたものをやろうと考えたりはしてました。

AOR、シティポップという言葉がありますが、これは都会への憧れを描き出したジャンルだとよく言われます。現代の都会的音楽といえばクラブミュージックです。クラブミュージックをちゃんと出来る理想的な場所は都会と都会の人間が居る場所以外には無いのではないのでしょうか。ここ数年は東京に行かせてもらう回数も増えまして、神戸の片隅ですぐ近所には音楽をやるクルーも、友達も居ない中で都会に憧れる自分が居ることに気がつくようになりました。

地元から離れた私学に通い、神戸でヒップホップをやろうとしていたもあまり馴染めず、なんだかんだ一人でネットでほそぼそを作品を発表して、そしてせっかくインターネットで見つけた場所やつながった友達も物理的には遠い。ただこうして発表する作品だけは都会の人にも伝わってますし、そうした中でどこかわけがわからなくなって、そういう気分をある程度共有とか整理できたらいいなと思っていました。自分が住むのは神戸のニュータウンですが、それがたまたま神戸であっただけで同じような状況に居る人はたくさん日本には居るはずですし、共感してくれるんじゃないかなと。ただ根底にあるのは長く過ごしたニュータウンにある愛着なのか、愛着を持ちたいという執着なのかは正直わからないです。ただ、たまにこの建て売り住宅、団地、マンションの立ち並ぶ無愛想な、それでいてまともな住環境のこの町から一生抜け出せなくなってしまうのではないだろうかとたまに不安に思います。

最近はこのニュータウンに対するコンセプトが大きくなってきて、結局どっちの名義でもあんまりやってることに差が無くなってきた（もともと作風的にもそこまで差をつけることは意識してませんでした）し、（茶番も面倒くさくなってきたし、）正直いい区切りではないだろうかと思ってそういう気持ちもタイトルに込めて "sweet days, sweet memories" を出しました。まあ正直言うと tofubeats のほうを本当に頑張らねばならない時期が来てるフシもあるのですが、そのようにぼちぼちかねてから考えていたことで、ジャケットに使われている女優 F さんのウェブサイト消滅もその区切りにちょうどかなと思い、dj newtown を解散することにしました。そもそも dj newtown が僕の別名義だと知らなかった人（そういう方が居るということは日頃のエゴサーチで知っています）にははっきり書いておきましょう、dj newtown は tofubeats の別名義です（でした）！

dj newtown のジャケットに使っている女優についてもいい加減に触れておこうと思います。最初はサンプリングにおけるイリーガル感を出そうと思ってたまたまファンだったから使った、というのが正直なところですが、賢く、清純に見え、素敵な美人の存在そのものが自分の中での都会（であってほしい場所）への憧れと通じるころがあり。また自分がいくら都会に行っても都会の人にはなれないように、まだ存在も確認できないそんな不可侵な存在としてのモチーフとして使わせてもらいました。ついでに言うとうちは中高 6 年間男子校出身なので、そのくらいの世代の女性という存在自体が僕にとっては都会と同じくらい、いやもっと非現実的な憧れではあります。あとこれまで連続で画像を無断使用したことはここでおわびしておきます。

冗談で "F 井さんと会えるときがきたら別名義とバラす" とよく言いふらしてましたので、先述の通り .net 閉鎖を受けて今回 newtown の解散を決定した節もあり、しかし F 井さんがまさかこのトリビュート制作中に復活するとは、嬉しい誤算でした。文化系少年はいつも美少女に勝手に振り回されますね。とは tomad 社長の言葉ですが、まあどっちの名前にしろあまり遠くない未来に例のお方や、もっと素敵な憧れの人にたくさん出会えるくらい、そんな人たちや変わらずこの pdf を読んでくれる人にも届くようないい曲を作りたいもんです。

最後に、今まで dj newtown に関わってくくださった方々、tomad 社長やマルチネ社員、今回突然のトリビュートに参加してくれた皆さんに感謝です。本当に 100 人いたら 100 人がどうでもいと思うような解散劇ですがですがまあこれからも結構なレベルでお世話になりますのでよろしくおねがいします。もちろんこんな pdf に目を通しての貴方もです。丸 3 年の茶番に付き合ってください本当にみなさんありがとうございました。

結構な時間が経って、自分の 10 代を振り返るときにこれらのつたない曲の入った MP3 を聞いてまさに今神戸の景色を見ながら考えていたことを思い出せば。

## dj newtown tribute に寄せて - tomad (Maltine Records 社長)

まず最初に「dj newtown」は「tofubeats」の変名である。「dj newtown」は2011年9月14日に解散した。解散とは終わりである。つまり「tofubeats」は自分の変名である「dj newtown」を2011年9月14日に終わらせた。「dj newtown」という名の物語とは何だったのだろうか。どうして物語を終わらせたかったのだろうか。

まったく何の答えもないまま筆を進めている。ゆっくりとMaltine Recordsにおける「dj newtown」のリリースと思い出を振り返っていきたい。2008年7月21日にMaltine Recordsから「dj newtown - Flying between stars(\*she is a girl)」がリリースされる。「dj newtown」のデビュー作でもある本作。何と言ってもタイトルにもなっているFlying between stars(seikan-hiko)が印象的である。TVアニメ「マクロスF」の挿入歌である「星間飛行」を荒々しく大胆にカットアップしている。Maltine Recordsにおいて正面から俗に言うアニメソングを扱ったのは「ダ・カーポ」のテーマソングを軽やかで繊細にエディットした「imoutoid - ADEPRESSIVE CANNOT GOTO THEREMONY」に続いて2作目だろうと思う。後からでた「dj newtown」はそれなりにこのリリースの事を意識しているだろう。だがその楽曲の方向性は大きく違う。細部から…

筆を止めて考える。細々と語るよりもっと大事なことがあるはずだろう。「dj newtown」について。それは青春に近い。いつだって、さいしょから、このレーベルがテーマにしていた。青春について。それは通俗的な青春という言葉の枠からは少しはみ出して。輝かしい過去のそして現在のそして未来の別名である。素晴らしい思い出について、素晴らしい出来事について、素晴らしい未来についての総称である。「dj newtown」は「tofubeats」という個人から生まれたけれども、それを超えている、超えたものを背負っている。今、dj newtown TRIBUTEを聴きながら、「dj newtown」が終わったあとの残響を聞きながら、そう考えている。「dj newtown」に向けられた全ての楽曲がdj newtownになっている。dj newtownというかけがいの無いもの。それを言葉に表すほど野暮なことはないだろう。dj newtownを聴くべきだ。ぼく(dj newtown)のディスプレイから、あなたのディスプレイに向けられて届けられている音楽を聴くべきだ。

約3年に及ぶ幽体離脱は楽しかっただろうか。「dj newtown」の役目は終わった。再び彼は「tofubeats」の元に帰っていきだろう。しかし彼は帰っていただけであり、その全てが消滅するわけではない(藤井〇菜が消滅したわけではなく、ただ事務所を移籍しただけのように…)。「tofubeats」が、またあなたが、その物語を引き継いで行くことを僕は願っている。

tomad

Maltine Records 主宰。

## dj newtown tribute に寄せて - 神野龍一

前回、dj newtown を語るにあたって、95年を軸に語ったので、今回はそれ以降の神戸とnewtown君についてのことを語ろうかな。「神戸」と「ニュータウン」っていうと、以降の出来事の話で、えーと、本当色々あって。それが今の時代とどこまで関わっていて、かつ自分と切り離すことができるのかっていうと正直心許ないんだけど、その後起きたちょっと大きな事件のことを語りたいと思う。

あの神戸の少年がなぜあんなことになってしまったのか、という理由は色々と言われて、マンガやらの影響とか家庭とか資質とか色々指摘されていたなかで、「ニュータウン在住」っていうのがあげられたりしたんだよね。計画された均質的で人工的な新興住宅地では街の猥雑な部分がなくて、少年たちのなんかむしゃくしゃした欲望とかのはけ口がない、ベッドタウンでは社会と生活の場が切り離されてよくない、とか云々。

で、そのために対策しようってことになって、中学生をしごと体験させて社会経験を積もうとか(対価もらえない労働がしごとになるかよ〜公務員)よくわかんないことが行われたりしたんだけど、

言いたいのは、「あの当時ニュータウンって言葉は決して肯定的な言葉ではなかった」ってことで、なんとなくそこには、人が息づいて文化をつくっていく「街」とは一線を画すものがあった。まあ言ってしまうえばはけ口というかアウトプットがなかった。インプットは後に続々作られたTSUTAYAなんかが一応まかなってくれるけど、それもほっとけば棚に眠っているだけの棺桶みたいなものだった。動く街に対して郊外は「止まった場所」だったし、いまもそれは変わらないだろうと思う。

でも、だからって郊外の人には止まっているわけじゃない。そういった場所でののはけ口がどこに向かったのかということ、それは確かに郊外からは現れることがなかったけど、この時期にできた新しい2つの裂け目一深夜の隙間に放送されたアニメ番組と、新しいメディアとしてでてきたインターネットーだったっていうことができると思うんだよね。そしてこの2つはこの後の日本の文化を考える上で欠かせない要素になる。

もちろんnewtown君も、その文脈を受けて現れた。均質的な郊外で深夜にアニメをみたり、TSUTAYAでCDを漁ったりしながら都会のダンスフロアを夢見る音楽。ただnewtown君が行ったのは、「断層」にあった要素をもう一度「郊外の音楽」として提示したこと。そうやって無機質な郊外の景色をほんの少しだけ変えた。

そう、ほんのちょっとだけ変えた。それは例えばかつてブロンクスの集合住宅団地に起こったような、日常や暴力闘争をパーティーにするような劇的な変化ではなかった。でもだからこそこの変化は重要で、この「ちょっと」はちょうどそれ「以前」と断層をつくりながら、かつ連続して変化した。ちょうど、アニメのセル画のカット前後みたいに。そうすると、それまで止まっていた郊外の景色が残像になり、「動き」が生まれた。それはjpgがmpgになるような変化、止まった画像が動き出すような変化だったんだ。それはまだたった一瞬の、コマ数秒の変化だったのかも知れない。そしてnewtownがいなくなった後も、この「ちょっとした変化」を続けて、郊外に動きを与え続けていかなくちやいけいないんじゃないか。それが郊外の残像、そしてdj newtownの残像に続いていくために必要なことなんだ。

最後に、dj newtown ありがとう。君のおかげで、明日が今日のリプライズにならなくて済む。

神野龍一

85年神戸生まれ。3歳からニュータウンで暮らし、現在は京都に在住。引っ越した直後にdj newtown およびtofubeatsの存在を知る。現在は職探しの傍ら、文章を書いたりしています。



# dj newtown 全アルバム解説 by tofubeats

## flying between stars(\*she is a girl) [MARU-024]

今となってはちょっと懐かしい dj newtown としての 1st アルバム。という名の WIRE08 に向けたハウスのテンポ楽曲の習作集。自分のどの音源よりも荒々しいサンプルの組み合わせが印象的。ほぼ全曲 J-POP サンプリング有りでネタものじゃない真面目なハウスを作る方向性やコンセプトはそこまで意識してなかったながらもそこそこに確立しつつあります。あとアルバムにイントロ、アウトロなど付けたがる習性も既に発揮。PARA ONE による浜崎あゆみのリミックスをまるごと参考にした表題曲 flying between stars(seikan-hiko) は個人的にはそこまでだったりするのですが今でも dj newtown では好きな曲と他人に言われることが多いです。この荒々しさは最近 ableton でデータ吸い出して再現しようと思っても不可能だったのでこの時にしかなかった謎のパッションが詰め込まれているのでしょうか。アウトロでは当時よくやってた参考書の CD からのサンプリングという敷居の低い技をやってみましたね。あとこのジャケットのダサさは今考えてもすごい

dj newtown

FfLLYyliNnGg

BbEeTtWwEeEeNn

SsTtAaRrSs

\*she is a girl

## high-school girl (we loved) [MARU-031]

1st とはうってかわっていきなりコンセプトアルバムになったっぽい 2nd。ジャケットに某女優(イントロ"みなさんに素敵な春が訪れることを祈っています"も某女優の声)の姿も見え、今に至るニュータウンっぽい感じはここから本格的にスタートします。楽曲数も増えて zip で落とすと隠しトラック(某日本語ラップのリミックス)も入っているという、そこそこ気合の入った作品になりました。このアルバムを最後にハード機材メイン、MPC1000 での制作をやめることになるので(正確には表題曲と N.E.W.T.O.W.N. は Ableton で制作)、パッドバシバシやって作る音像的には荒々しめのカットアップ的な作り方はここまでにあります。これ以降はわりかし真面目に midi で直したりしてますね。keep you fresh のフィルターなどは MPC でかけているので今考えたら面倒臭いことしてたんだなあと感じます。この表題曲はこれまでやったことなかった自分での歌唱に挑戦しています。シンプルな展開で、かつサビだけ歌あるポップスみたいなのはすごい意識して制作しました。しかし致命的音痴の僕の歌がまともに聞こえるだなんてテクノロジーは進歩していますね。



## DANCEWITHYOU [MARU-039]

マルチネから音源を出すにあたってライブや DJ も増え、PC ベースの制作に切り替わったのもありどんどん制作する楽曲がフロアライクになってきた 1 枚。Ableton もぼちぼち慣れて過去 2 枚とは全然違う毛色になっています。とかいって ego-wr ○ ppin' をサンプリングして Das-EFX のリミックスを作るなんていう感じもあり。内容としては当時本気で好きだったウテナの声ネタで始まる hi-fi set ネットのプチ上げハウス DANCETONIGHT から始まります。Silky heart でやったようなカットアップはグリッチっぽくもなりきらずエレクトロでもなく、中盤はアパッチ使いという変なラインを行っていたんじゃないかなあと今になったら思います。そして個人的にも結構好きだったのでのちのち cocop 氏に歌ってもらう 2005 もこれに収録。ちなみに本当に実家自室は 4 畳半くらいです。これは最初歌詞が全然わかんないと各所で類推されたりしてるのを見て面白かったです\*。サビ以外は本当に適当に歌ってるんですけども。これも先述の"サビだけ歌があるポップス"のイメージで制作しています。あと完全にノンフィクションのリミックスは、千里ニュータウンについて歌っているバンドがいる、という情報を入手し、こちらからお願いして素材をいただいて作ったものでした。今回から客演リミックスも収録するようになり、同い年の 4sk くん、一個下の Herculot くんの前アルバムの表題曲をリミックスしてもらいました。とくに Herculot くんは当時 ACID であるリミックスを仕上げたらしく驚愕した覚えがあります。あと smoothバージョンで tofubeats が参加するという茶番もここから。



\*夜のダンスフロアを夢見る 4 畳半のルーム 揺れるヘッドホンケーブル 引っかかって抜ける 未知の関係性とブーム ふたり最小公倍数 椅子の前で youtube お気に入り登録して("2005"-歌詞)

## cutegirl.jpg [MARU-058]

続いてわりかしフロアライクな楽曲が並んだ 4th。イントロで tofubeats 参加という茶番からスタートして激烈カットアップステップの SWEAT&TOUGHNESS、マルチネのコンビ"that is my house"で提供したものをさらにシカゴに接近させることに挑戦した house music all night long(urbanized)。そして表題曲で歌物という、やはり前作を踏襲してる感ありますね。ちなみに house music in her room のみは 2nd のときになぜか作ったあとポツにしていたのを収録したもので、1 曲だけ製作時期が違います。"It's too late" の軽い感じも自分では気に入っています。元ネタの曲(高橋○子 - サンセット・ロード)もすごい最高なのですが"恋に向かない人など居るのかしら"ってなんてパンチラインなんですか。最後を締める表題曲はわかった人も多いかと思いますがなんとなく tumblr とかを題材とした曲です。加えてこのアルバムは 2005 のリミックスをなんと 6 曲も収録しており、半分がリミックスアルバムという側面も持ちあわせております。とくに 909state さんに関しては、依頼をしたところ速攻 4 パターン送られてきてどれも落とすのがもったいないということで全部採用したりしました。okadada リミックスのイントロからにかけてのリズムセクションのビルドアップっぷりはやはり流石といったところです。



# dj newtown 全アルバム解説

## MOSAIC [MARU-087]

cocop 氏に歌ってもらった 2005 を再びマルチネ周辺の人にリミックスしてもらおうというアイドル企画盤。ちなみに MOSAIC というのは知らない方のために説明しますと神戸のシンボルポートタワーのすぐ横にある複合商業施設つうかベタなデートスポットですね。ちなみにこの観覧車に乗ると別れるってジンクスがあるって最近テレビで女子高生が言っていました。不穩！ high school girl もカヴァーしてもらいました。ジャケットは藤城嘘氏に依頼。新曲は最後の "わたしはアイドル" のみですが、非常に濃厚なリミックスアルバムになっています。Hypnotic Inc. リミックスのアンセム感はとてつもなくヤバい。以下でも解説しますがこのアルバムにオファーされなかった腹いせという理由で Vol.4 Records から非公認で 2005 リミックスアルバムがリリースされたりもしていました。

## sweet days, sweet memories [MARU-089]

正直タイトル的にも感じられますがぼちぼち dj newtown としての活動に区切りをつけようかなといった具合の 1 枚。誰も居ない大学の中庭で缶コーヒーを飲みながら macbook でコンコン作った表題曲、白い TOKYO のアウトロのサンプリングから始まる white beatdown はじめ、前作 3 枚くらいのダンスな感じをグッと落として郊外についてじっくりと見つめ直した雰囲気です。Maltine Records でリリースするにあたってシングル的な派手な曲が 1 曲は入ってないといけないという風に自分で今まで考えてリリースしていた節もあったのですが、tomad 社長から zip 提出を許される関係になったこともあり (Maltine Records は結構 tomad 社長からディレクションが入ることもある)、多少レイドバック度が増したのでしょうか。といつつもかなり本場の UK garage を意識した we don't understand も収録。トリビュートでも自分がやりましたがこれに収録の "dream" という曲が地味ながら個人的にはものすごく大好きです。

# dj newtown ソトシゴト解説

## tofubeats - 朝が来るまで終わる事の無いダンスを feat,dj newtown

これが実は作曲tofubeats、歌唱dj newtown(という設定)ということに気づいていた人は一体何人居たんでしょうか。せつかくのマルチネの記念すべき CD ということで 2 人で参加した 1 曲。今これを書いている時点で人生で一番完成まで時間がかかった曲です。いまだに数現場毎に直しています。自分で曲を作るときにめったに無いことなのですが、例のメロディが歌詞ごと最初に思い浮かんで、それに肉付けしていった曲です。AB メロが書けなくて結局最後までサビでやる手法でただひたすらに曲名っぽい文字列が繰り返される展開ですが、それがまた終わること無い感じ出でて嫌じゃないです。ただちょっと 7 分は長いかなと今でもちょっと思いますね。

## 南波志帆 - はじめまして、私 (DJ NEWTOWN remix)

今でも毎作品買うくらいファンですが、そんな南波志帆さんのインディーズ時代に出た TEENAGE SYMPHONY という企画盤に提供したリミックス。dj newtown 名義になった経緯はさておき、非常に大事に作った記憶のあるリミックスです。シンプルながら南波さんの綺麗で上品な歌声を潰してしまわないように意識してやりました。今聴くと全然物足りなかったりもするのですが、当時の精一杯が詰まっているという部分もあり、作業していたころを思い出します。あとこの曲は初めて他人というかエンジニアさんにミックスダウンも頼んだ曲になるのですが、パンニングとか非常に丁寧に直してもらえてものすごく自分の家で作ったものより上品になって感動した覚えがあります。

## house music all night long

Maltine Records のコンピレーション that is my house に収録。正直言うとなんかイマイチだったので後にアルバム cutegirl にてリメイクすることになります。こちらのバージョンは声はまだ遅回しになってませんしアシッドっぽいベースラインもまだ 303 っぽくないシンセ、あと urbanized では途中で大ネタは挿入されますがそれもまだですね。

## tofubeats - BABY GIRL (dj newtown rework)

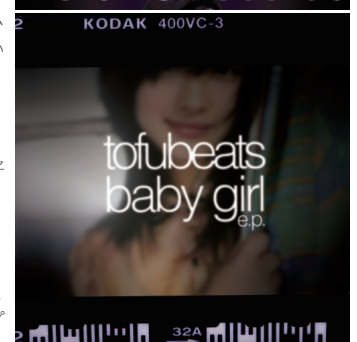
BABY GIRL e.p. に収録。原曲のぬらぬら感を少々おさえてメロウな成分を少し増やしてみた作品。イントロは好きなアイドルの某舞台からサンプリング。

## oto wo awasete

HTC さん企画のぞつおんコンビに提供。テーマにそってぞつおんに当たるものをどうやって入れようかと考え、J-POP を録音したカセットを、壊れたカセットウォークマンで再生して、その音を PC に録音してカットアップして作った作品。入っているノイズもカセットなどのノイズを増幅したものです。後半は自分のものすごい好きな最近ではジャズ DJ になっている某アイドルの 7 インチからサンプリング。ギターっぽい音は実はオートチューンをかけた声にディストーションなどをかけたもの。

## V.A. - 2005Remix Compilation

Vol.4 Records から全く本人も知らない内にリリースされていた怪リミックス集。dj newtown からオファーが来なかった腹いせに集まったリミックスは案外バラエティに富んで良い感じのアルバムになっています。とくに iserobin 氏のちゃん曲がったグルーブがかなり最高の iserobee remix や、同い年 charlot くの 200.5remix は原曲活用していながらも上品に、かつ少しトーンダウンして仕上げているのがとても良いです。







ニュータウンに住んでいる君はどこ 今何をしているのかい

